

## 第 18 回富士山世界文化遺産学術委員会議事録

日時：令和 4 年 2 月 4 日（金）14：00～16：00

場所：WEB

### 1. 開会

山梨県観光文化部 村松文化振興監より開会挨拶。

### 2. 報告事項 「富士山登山鉄道構想」の進捗状況について

事務局：資料 1 を説明。  
(特に質疑はなし)

### 3. 議事

#### (1) 富士山富士宮口五合目来訪者施設に係る遺産影響評価書について

事務局：資料 2 を説明。

加藤委員：説明内容は、特に問題ないと考える。

今後も、こういった何かを作る、何かを作り変えるということが富士山五合目より上に限らず、富士山周辺でいろいろ出てくると思う。一つ一つの計画は、静岡県や山梨県において十分検討されると思うし、また民間でも十分に意識して計画されると思うので、事業単体で問題になることは、ほぼないであろう。一方で、一つ一つは問題ではなくても、多く出てくると総体としては何かおかしなことになるのでは、と危惧する。そこで、今回のようなこと（遺産影響評価）があるたびに、富士山全体としてのビジョン、基本的な考えかたを合意しておいたほうがいいのかと考える。もちろん開発が富士山の神聖さ等に影響を与えないということは大切だが、それは一つ一つの事業が出てきてからの判断基準であって、いま私が提案しているのは、事業をそもそも提示するか提案するかということに関わる議論の必要性である。具体的には、例えば、既存施設の改修、或いは取り壊しに伴って何かを作ることでない限り、原則として、新たに富士山に手を入れることをしない、或いは、富士山の地質とか自然環境を守るためでない限りは、例えば五合目から上では人為的改変を行わないということ、そろそろ検討し始めてもいいのではないかと。

事務局：まず今回の富士宮口の五合目来訪者施設は、まず施設単体での前提として、富士宮口五合目のあり方を検討している。また、富士山全体の今後のあり方ということについては、すでに種々のビジョン・戦略を作成している。さらに保存管理計画があるので、まずそちらをしっかりと進めていくことが肝要と考える。この施設を例にとると、遺産協議会でも当然ご承認いただく必要があるが、同時に文化庁・環境省としっかりと協議をしながら進めている。

加藤委員：ビジョン、保存管理計画は非常によくできたものだと思う。ただ、富士山の全体をどんなふうに残していきたい、守っていききたいかというイメージの把握は必要。たとえば日本の国立公園等々をみると、多くの方々が関与しており、それぞれ立場、考えかたをお持ちである。何か新しいことをしていきたいということで

開発ということを提案される。それ自体は決して悪いことではないが、そのような提案があったときに、総体として何か大きなイメージがあった方がいいのかなと考える。それはビジョン、或いは管理計画というよりも、もう一つ何か、大ざっぱではあるけども全体を俯瞰できるようなものがあった方がいいのかなと感じた。確かに、自然公園法、或いは関係法令・規制があることは重々承知している。一方で、そういった制度もすべて、それぞれの土地の地権者・管理者が、国立公園の枠組みとは別に存在するという仕組みの上で作られているため、なかなか強い法律上の規制がかけられない場合もある。

今回の遺産影響評価をきっかけに考えたことで、だからといって特にどうこうというわけではない。今まで何かおかしな計画が出てきたとも思っていない。特に世界遺産になってからは、非常にしっかりと管理されていると思う。多くの方々が富士山をしっかりと守っていきこうもっと良い富士山にしていこうと思ったときに、全体として見たときに「あれっ」と思うようなことがないように、ということである。

稲葉委員： 加藤委員の指摘はよく理解できる。そのために、ビジョンがあり、計画があり、そしてH I Aのプロセスを、すでに昨年度決めたところである。まずは、今まで決めたことをきちんと検証していくということが大事ではないか。

委員長： 今の加藤委員のご意見はテイクノートしておいて、もう少し現状の推移を見るということではいかがか。  
(委員・事務局とも異議なし)

## (2) 新型コロナウイルス感染症による富士登山への影響に係る対応について

事務局： 資料3～資料3-2を説明。

加藤委員： 新型コロナによって大変な影響を被られた方々が多いと思うが、しかしその一方で、非常に得がたい経験でもあった。まだ、「あった」と過去形で語ることはできないが、その状況というのを調べておくことは大事だと思う。

その一方で、あまりいろいろなことを調べようとする、調べなければいけないことが多過ぎて大変なことになってしまうだろう。事務局は既にお考えだと思うが、小委員会等々との意見交換を重ねながら、どんなところに、この新たに行われる調査のデータを使いたい、或いは使えるのかということも意識しながら、必要な資料の収集そして分析を行うということ、まずは考えることが必要かと思う。それ以外の、一般的な情報調査は不要かという、必要なことは確かだが、調べだすと大変なことになってしまう。

そこで、今まであまり意識されていなかったことで今回わかったことに焦点を絞ってはどうか。たとえば、富士山の登山者が多過ぎるという意見はずっとあって、そのために利用者管理ということで検討を重ね、対策も進められてきた。一方で、山小屋、或いは民間観光業の方々に基本的にお願ひしている富士山の利用サービス、それを維持するにはどれだけの利用者・訪問者が必要なのかというような検討はされてこなかった。そういうことに繋がるデータというのがあれば、大変ありがたい。

それから、昨年度は富士山が閉山し、今年度は開山した。利用者は非常に少なかったが、それでも混雑は起きている。そうすると、どこまでの混雑は、言い方は悪いが、「仕方がないと思って諦める」のか。そこは、どうしようもないぐらいのものとして、それ以外のところを、できるだけいい富士山にしていこう。例えばそんな考え方ということが出てくるのかもしれない。そういうことに繋がるような、これだけ人数が少なくても、どこでどのような混雑が起きているのか、それはなぜなのかがわかれば、利用者管理については非常に大きな知識、知見になるかと思う。

また、ひと夏、人が入らず、そして翌年も、利用者が非常に少なかったときに、今まで富士山であまり見たことがない動植物というのが、出てきて、戻ってきているのかもしれない。これは、専門の方々のお力を借りなければならぬが、そういう情報があれば、今まで富士山ではあまり自然生態系の業務をしてこなかったが、その必要性が再認識されるかもしれない。

単に調査をやるというのではなく、どんなところに使えそうか、どんなところに使いたい、そういうことを意識しながら行くと、非常に有意義なものになると考える。

中田委員： 2点について説明を求めたい。一つは、コロナの案件において、なぜ登山者の混雑日を何日に抑えるか、という議論が出てくるのかということ。もう一つは、破壊や事故に繋がるおそれのある混雑日が数日間発生することを甘受しても、全体の登山者数の平準化を目指そうとする来訪者管理戦略の妥当性について。

事務局： まず、コロナ以降の富士登山の状況を調査するにあたり、その背景として、従来の来訪者管理戦略を提示した。誤解を生じる場所があったことをお詫び申し上げる。この戦略において設定した吉田登山口の4000人、富士宮登山口で2000人といった登山者人数は、3年間の調査結果を反映したものである。GPSロガーを付けた調査の結果、危険な事態というのは常に富士山の特定の日時、場所において起きているということがわかった。この結果が、現在の来訪者管理戦略の中の、登山者設定の根拠のひとつになっている。

中田委員： 理由はよくわかったが、ただ戦略的に、この方がいいのか少し疑問に思う。資料を拝見したところ、混雑時に平方メートルあたり1.25人、それを超えるのが混雑・危険という指標になっているが、特にこのコロナ禍であれば、平方メートルに1人以上いったら、やっぱり値が近すぎると指摘されると思う。

鳥取砂丘でポケモンGOというイベントが県知事主導で実施されたことがある。その時に、かなり多くの人が1日、数時間の間に訪れたために砂丘がかなり破壊されて、希少植物もなくなってしまった。これとは同じとは言わないが、混雑日を限るという戦略というのは、果たしていいのか疑問である。

木下委員： (富士山の来訪者管理を検討する材料とした) 収容力の概念を、物理的・社会的・生態的の三つの観点から検討したとあるが、そもそも、五合目以上の、登山者数の安全な数を推定するには、五合目以上のことだけを考えるのではなく、五合目以下のことも考えた上で両方を満足するような数値を設定するべきではないかということをお申

上げたい。特に、生態的収容力は、五合目の上と下で自然環境の様子が違うため、五合目以上に影響を与えない数が必ずしも五合目以下の自然環境や生態系に影響を与えないとは、自動的に言い切れないと思う。おそらく杞憂だとは思いますが、もし影響を与えないのであれば与えないということを、しっかり明記すべきだと思う。

稲葉委員： 現行の来訪者管理戦略と保存管理計画は、すでに世界遺産委員会に提出をして、承認を受けている。ピークカットをする、つまり五合目以上の人数をどう制限するか、ある人数を超えた日を減らすという計画は、2013年の世界文化遺産登録から3年ぐらいかけて作った。よって、現在そのあり方そのものを問うことになる、ユネスコに提出した計画の変更になる。

現在、議論しているコロナ以降の登山者の傾向調査は、本来はそのピークカットを見ていくためのモニタリングをしてきたわけだが、そのピークカットをする以前に、コロナ禍で登山者数そのものが減っているため、できていない。したがって現在、コロナ禍においてどうあるかということをもまずは調査をする。その上で、すでに減らすことで協議が整っている来訪者管理戦略を今後どうしていくか、がその先の議論になる、と理解している。以前の計画に基づいてどうだったかということが、これからの検討の方向性だろう。

委員長： それでは、さらに精密な調査の方法というものも、これから考えていかなければならないとは思いますが、現状では提出された案を承認したい。

(委員・事務局とも異議なし)

4. その他：委員・事務局ともなし

5. 閉会

以上